

財北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第75集

恵庭市ユカンボシE4遺跡 抜刷

# ユカンボシE4遺跡出土の植物遺体

吉 崎 昌 一

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

平成4年3月27日

## ユカンボシE4 遺跡出土の植物遺体

吉崎 昌一 (北海道大学)

### (1) 遺跡の性格ほか

ユカンボシE4 遺跡は、北海道恵庭市戸磯401-24ほかに広がるユカンボシ川沿右岸の段丘上の遺跡である。この地域では、一般国道36号線恵庭バイパス建設工事及びユカンボシ川の改修工事が実施されるが、それに先立って北海道埋蔵文化財センターの手で工事範囲にかかる遺跡の一部が発掘調査された。調査は平成3年5月7日から同年8月10日かけておこなわれ、発掘された総面積は4,370㎡。出土した遺物から見ると、縄文時代早期から擦文時代にかけての各時期のものが断続的に検出されている。発掘区で確認された遺構には土壌、落し穴、焼土、竪穴様遺構などがある。このうち竪穴様遺構は擦文時代のもので1基確認されているのみである。また、柱穴だけの平地住居らしき痕跡は、ごく近世の開拓期のものであるという。

### (2) 出土した植物種子

遺跡の保存状態の関係であろうか、炭化植物種子の出土数はきわめて少ない。縄文時代早期から後期にかけての層準からは、クルミを除き分類の明確でない不明種子がわずかに5粒、擦文時代の層準からはマメ科の種子が2粒、ブドウ属種子破片が1点、不明種子が4粒出土しているにすぎない。そのほかにも種子状のものが出土しているが、後述するように植物種子ではなく菌核であった。以上の種子の出土層準、サンプル土壌の採取区、遺構名などは表に示し、さらに若干の説明を加えておきたい。

#### クルミ属 *Juglans* L. 図版 1 No. 5

クルミ内果皮片が縄文時代の各層準から断片的に出土している。炭化した細片ばかりで、あきらかに人間が破碎した状況が読み取れるが、とくに集中して出土してはいない。擦文時代の層準からは発見されていないが、この出土状態に意味があるかどうかははっきりしない。

#### マメ科 *Leguminosae* 図版 1 No.1a~1b

No.1aに示した資料は長さ1.4mm、幅1.4mm、ややつぶれた球形で中央にヘソがある。加熱によって変形している可能性がある。1bはヘソ部分の拡大。我々の調べたいいくつかの遺跡においてよく見られるタイプで、何らかの形で人間が意図的に関与していたとも思われるが、詳細は不明である。今後の出土例の増加と現生資料の確定を待ちたい。

#### 不明種子 図版 1 No.2a~2b

図示した資料は長さ1.5mm、幅1.25mm、ほぼ球形で表面に入り組んだ細かなしわが見られる。このタイプの種子もよく見られるものであるが、どの植物であるのか判断しかねている。ユカンボシE4ではTピット4及び5から5個出土している。

#### 菌核 図版 1 No.3a~3b

表面が滑たくでほとんど構造を持たない球形の資料である。最初これが何であるか分からなかったが、北海道大学農学部五十嵐恒夫教授の教示によって菌核であることが確定した。資料によってはどの種類であるか判明する可能性があるというが、その生成が遺跡を残した人間と同時間であるとは言えない。いまのところ、時間と余り関係しない環境指標のデータとして利用できるかもしれないと考えている。

ブドウ属 *Vitis* L. 図版 1 No.4

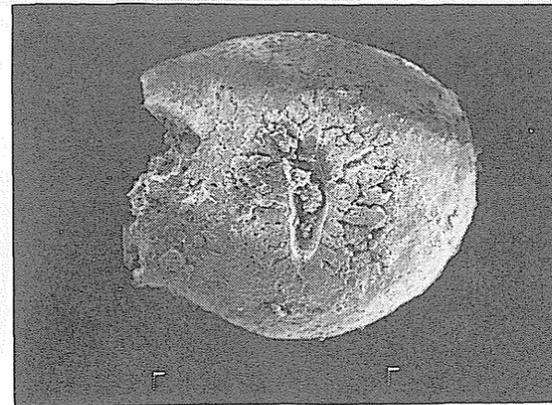
図示したようなブドウ属種子の破片が地床炉FP-28から1個発見されている。この仲間にはエビヅルとヤマブドウがあるがそのどちらとも言えない。

(3) 考察

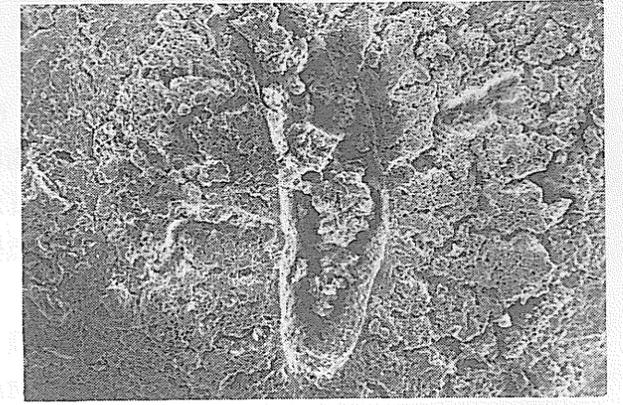
この遺跡の植物種子の出土量は、これまでに我々が関係調査した北海道内の遺跡としては例外的に検出数が少ない。調査者によれば、縄文時代早期の層準においては各種の礫を割ったものが大量に出土し、その分布が焼土と関係している可能性が見られたという。また、擦文時代の竪穴様遺構は居住の痕跡が認められなかったとのことである。縄文時代については若干の問題は残るにせよ、擦文時代の遺構、とくに竪穴居住を中心とする集落においては、これまでの他遺跡の発掘結果を見るかぎり雑穀種子の出現頻度がかかなり高いのが普通である。しかしながら、この地点からは雑穀種子が検出できなかった。このような植物遺体のあり方から考えて、ユカンボシE4遺跡が通常の集落の一部でなく、多分にセレモニアルな地点ではなかったか、ということ推定させるのではないと思う。アイヌ民俗例でも、集落から若干離れた地点にある種の送り場（祭祀的な物送り場）のあることが知られている。そうした特異な場が石器時代以来のいろいろな伝統の中に存在していたとしても不思議ではないだろう。明確な竪穴住居などの遺構を持たず、さらに出土物の傾向に偏りが認められるようなケースについては、今後の事例を待って再検討する必要があると考える。

1991年度 恵庭市ユカンボシE4 遺跡出土炭化植物遺体一覧表

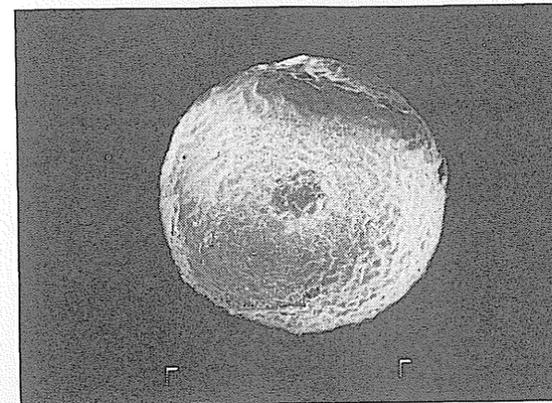
時期	遺構名	サンプル採取区	クルミ属(g)	マメ科(粒)	ブドウ属片(粒)	不明種子(粒)
縄文早・前期	FP2	1・5-46	>0.01			
縄文早・前期	FP6	3・5-35, 36	>0.01			
縄文早・前期	FP10	4・8-20, 30	>0.01			
縄文中・後期	FP20	4・6-35, 36	>0.01			
縄文中・後期	FP32	2・0-46, 47				1
縄文中・後期	TP4	3・7-11, 21				2
縄文中・後期	TP5	2・9-81, 91				3
擦文早期	竪穴焼土1	1・6-05, 15		2		2
擦文早期	竪穴焼土2	1・6-24				1
擦文以降	FP45	1・7-15, 25			1	
計			>0.01	2	1	9



1a マメ科?



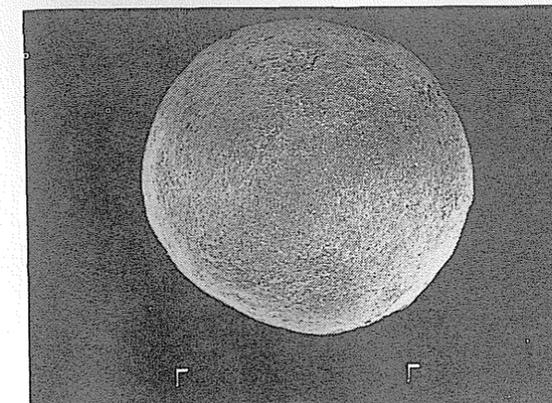
1b 1aの拡大 約100倍



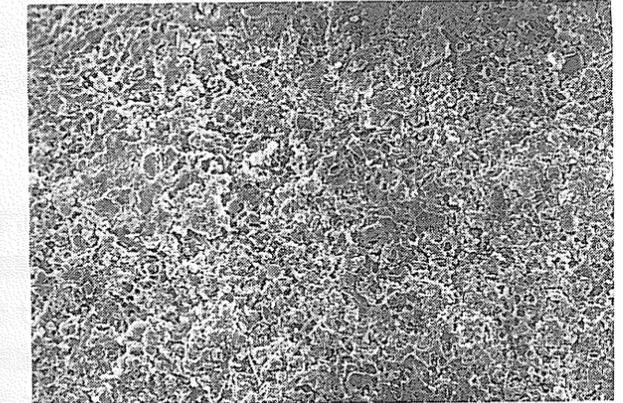
2a 不明種子



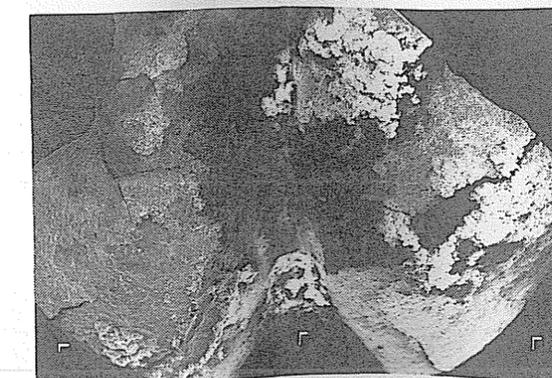
2b 2aの拡大 約150倍



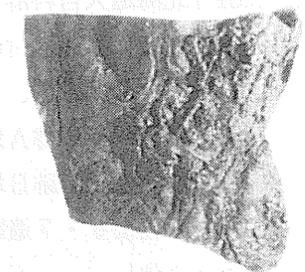
3a 菌核



3b 3aの拡大 約200倍



4 ブドウ属



クルミ属内果皮片

スケール「」の間隔 1.0mm

## 引用・参考文献

- 飽津博史 1977「方割石」『WakkaoiⅢ 4. 4. 6』
- 阿部朝衛 1983「バイポーラーテクニックの技術的有効性について」『考古学論叢Ⅰ』
- 石附喜三男 1984「擦文式土器の編年的研究」『北海道の研究 2 考古篇Ⅱ』
- 石附喜三男ほか 1977『ウサクマイ遺跡 N地点発掘報告書』
- 上野秀一ほか 1987『K135遺跡』
- 宇田川洋 校註 1981『河野常吉ノート 考古篇1』
- 上屋真一 1991「擦文時代の石器」『南島松1遺跡 南島松4遺跡 第Ⅱ章 3. (2)』
- 上屋真一ほか 1987『カリンバ2遺跡』
- 上屋真一ほか 1989『ユカンボシE8遺跡』
- 上屋真一ほか 1990『柏木川11遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1984『カリンバ2、カンリンバ3遺跡試掘調査報告書』
- 大場利夫・石川徹 1967『千歳遺跡』
- 大沼忠春 1989「初期擦文土器」『古代史復元9 古代の都と村』
- 長見義三 1976『ちとせ地名散歩』
- 角川書店 1987『角川日本地名大辞典 北海道』
- 菊池徹夫ほか 1975『烏柵舞』
- 木村哲朗 1991「西野幌12遺跡の焼土について」『北海道考古学第27輯』
- 木村英明ほか 1981『柏木B遺跡』
- 久保 泰 1983「第16群土器」『白坂 第4章Ⅲ 1』
- 後藤秀彦ほか 1975『十勝太若月一第三次発掘調査一』
- 古原敏弘 1985「中野台地A遺跡」『静内町清水丘における考古学的調査 第1章』
- 高橋正勝 1971『柏木川』
- 高橋正勝ほか 1982『萩ヶ岡』
- 千歳市教育委員会 1984『末広遺跡における考古学的調査(続)』
- 千歳市教育委員会 1988『ユカンボシ2遺跡発掘調査概要報告』
- 千歳市教育委員会 1989『イヨマイ6遺跡における考古学的調査(1)・(2)』
- 千歳市教育委員会 1990『ユカンボシ2遺跡発掘調査概要報告(2)』
- 千歳市教育委員会 1991『ユカンボシ3・5・6遺跡発掘調査概要報告』
- 戸磯史編集発行委員会 1989『戸磯百年のあゆみ』
- 北海道新聞社 1981『北海道大百科辞典』
- 豊田宏良 1987「擦文土器にみる貼付紈帯文様の分析」『溯航第5号』
- 松浦武四郎 著、高倉新一郎 校訂、秋葉実 解説 1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中』
- 松谷純一ほか 1989『中島松5遺跡A地点』
- 松谷純一ほか 1990『中島松5遺跡B地点、中島松7遺跡C地点』
- 松谷純一ほか 1988『中島松6・7遺跡』
- 横山英介 1990『擦文文化』
- 渡辺 茂 編著 1979『恵庭市史』